

## 業務効率化を目的とした尿中有形成分分析装置における目視基準の再検討

◎森部 龍一<sup>1)</sup>、安藤 菜奈子<sup>1)</sup>、山口 京子<sup>1)</sup>、谷 浩也<sup>1)</sup>、中山享之<sup>1)</sup>  
愛知医科大学病院 中央臨床検査部<sup>1)</sup>

【はじめに】尿沈渣検査(目視法)は、時間と手間が必要な検査である。近年では省力化・効率化を目的として自動化が進み、当院でも全自動尿中有形成分分析装置UF-1000i(シスメックス株式会社、以下UF-1000i)を使用してきた。今春これをUF-5000(シスメックス株式会社、以下UF-5000)へ更新し、新たな目視基準を設定したが、UF-1000iと比較し、目視率が上昇した。今回我々は、更なる業務効率化(目視率の低下)を目的に、目視基準の再検討を行ったので報告する。

【対象および方法】2023年2月13日～3月17日の間に当院で尿沈渣検査が依頼されUF-5000と目視の両結果が得られた検体3197件を対象とし、赤血球(RBC)、白血球(WBC)、扁平上皮細胞(Squa.EC)、尿細管上皮細胞(RTEC)、異型細胞(Atyp.C)、硝子円柱(Hy.Cast)、非硝子円柱(Path.Cast)、結晶(X'TAL)、酵母用真菌(YLC)、精子(SPERM)、細菌(BACT)について、機械値と目視の一致率80%以上を自動送信可とする新基準を作成した。また、同一対象を用いて、UF-5000導入時に設定した基準(旧基準)と新基準の目視率の変化を評価した。

【結果】新基準は、RBC 111.2/ $\mu$ l未満、Squa.EC 55.6/ $\mu$ l未満、Tran.EC 5/ $\mu$ l未満、RTEC 5/ $\mu$ l未満、Atyp.C 0.5/ $\mu$ l未満、Hy.Cast 2.0/ $\mu$ l未満、Path.Cast 0.27/ $\mu$ l未満、X'TAL 5.6/ $\mu$ l未満、YLC 5.6/ $\mu$ l未満、SPERM 5.6/ $\mu$ l未満、BACT 100/ $\mu$ l未満となり、Hy.CastとPath.Castのみ旧基準(Hy.Cast:0.13/ $\mu$ l未満、Path.Cast:0.13/ $\mu$ l未満)から変更した。目視率は旧基準で79.7%、新基準で47.0%であった。

【考察】新基準は旧基準と比較し、目視率を32.7%低下させることが可能となり、大きな効果が得られた。しかし、この値は尿定性検査結果や特定診療科(腎臓リウマチ膠原病内科、腎移植外科)との取り決め(全検体目視にて報告)による目視検査を考慮しておらず、それらを含めた実際の目視率はもっと高いと推察される。今後は、これらを加味した実質的な目視率低下の実現を目指し、さらなる検討を進めたい。(連絡先:0561-62-3311)